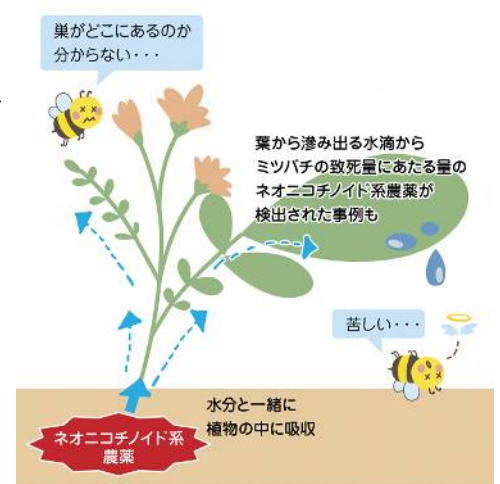


## 農薬「ネオニコチノイド」

## 子どもの発達障害や大人の神経難病に影響？

90年代はじめに世界各地や日本でもミツバチやトンボが姿を消し、ウナギやワカサギが激減しました。このような現象を引き起こすと考えられているのが「ネオニコチノイド系農薬」です。近年増えている子供の自閉症など、発達障害への影響も疑われています。ヨーロッパでは3種のネオニコチノイド農薬の屋外での使用が全面的に禁止され、北米や中国、韓国でも規制がスタートしました。ところが、日本は世界の動きに逆行し、使用促進に向かっていきます。1990年代に世界中でミツバチの大量死が報告されました。その原因を研究する為多くの研究者によって調査が行われた結果、2012年に「ネオニコチノイド系農薬」が直接の原因であることが科学的に証明されました。ネオニコチノイド系農薬によってミツバチの神経系がダメージを受け、方向感覚や帰巣本能が妨げられたこと、農薬が付着した花粉や蜜をたべることで幼虫の育成が阻害されたことなどが原因と考えられています。農薬のせいでミツバチが姿を消してしまったら、農作物の実がなくなったりして、食卓は貧しいものになってしまうでしょう。



ネオニコチノイド系農薬は、有機リン系農薬に代わって90年代に登場し、世界中であつという間に普及した新しい農薬です。浸透性が高く、残留しやすいのが特徴で、米、野菜、果物、茶葉などさまざまな作物に使用されています。稲作では、田植え前に育苗箱で苗を育てますが、この育苗箱にネオニコチノイド系農薬を散布しておくだけで、殺虫効果が長く続きます。無農薬の田んぼでは、トンボやユスリカの幼虫、オタマジャクシなど様々な生物が生息していますが、ネオニコチノイド系農薬を使用した田んぼでは生き物の気配がなく、雑草もほとんど生えません。

ネオニコチノイドや有機リン系農薬は神経伝達物質の働きをかく乱するので、虫は正常な神経伝達ができなくなります。ミツバチは低用量のネオニコチノイド系農薬を浴びただけでも方向感覚を失い、巣に帰れなくなると考えられています。ネオニコチノイドがニコチンと似た作用を及ぼすという報告もあります。自閉症やADHD(注意欠如多動性障害)、LD(学習障害)などの発達障害が増えています。これにも農薬が子供に与える影響について研究がされており、脳の発達が盛んな幼児期までに農薬にさらされたり、農産物から農薬を摂取したりすると、学習障害や知能低下のリスクが高くなることが明らかになっているのです。ALS(筋萎縮性側索硬化症)、パーキンソン病などの神経難病と農薬の関連性も指摘されています。日本の農産物は安全というイメージを持つ人も多いと思います。実は日本は世界でも有数の農薬使用国です。戦後長い間、単位面積当たりの農薬使用量は世界一の時期が続きました。農産物を摂取しても人体に影響を与えないよう、残留農薬基準が定められていますが、この基準も日本は米国の1~25倍、EUの1.5倍~300倍と高く設定されています。農林水産省は日本の農産物輸出を促進しようとしていますが、残留農薬が障壁になるケースが増えています。2013年末から3か月にわたって台湾に輸出されるはずだった農産物の一部が、残留農薬基準をオーバーしたため廃棄されてしまいました。なかでも多かったのがイチゴです。日本の農産物は安全だと考える人が多いようですが、海外では廃棄されてしまうほど農薬が残留した農産物が日本では売られていることも知っていただきたいと思います。ネオニコチノイド系農薬は浸透性が高い為、洗っても落ちないうえ、内部にまで浸透するので厚く皮をむいても取り除くことはできません。特に、脳の発達が盛んな子どもには、できるだけ無農薬の農産物を食べさせてあげたいものです。

あまり知られていないですが、コバエ、ゴキブリ、白アリなどを駆除する家庭用の殺虫剤やガーデニング用の殺虫剤、虫よけスプレーにも危険な農薬が含まれていることがあります。揮発して鼻や皮膚から簡単に入り込んでしまうので、安易に使わないこと。吊り下げタイプの虫よけが手軽で人気ですが、中には危険な農薬が含まれている商品もあるので注意しましょう。

空中からの農薬散布は水田や畑、松林など広範囲にわたって行われています。農薬を浴びた子供たちの中には頭痛や吐き気、異常行動がみられるとの報告もあります。学校周辺や通学路などでの散布を禁止するよう働きかけることが、子供を守ることに繋がります。新農薬「ネオニコチノイド」を知ろう 水野玲子